好むことと知ること
——青木正児の学問にちなんで

井上　進

ただいまご紹介にあずかりました井上です。今のお話しにもありましたとおり、私は中国史、歴史の人間でして、中国文学の専門家ではありません。ですから、中国文学の研究者である青木先生の学問的業績を専門家として語る、ということはちょっとできかねるわけです。ただ私、青木先生のファンではありまして、一ファンとしてなら、先生を語ることも許されるでしょう。またせまく中国文学研究と限ればともかく、もう少しひろく中国伝統文化の研究といえば、私も専門家のはしくれ、のはずです。とすれば、中国という研究対象に外国人である先生がどう向き合ったか、といった問題を考えてみることは、私にとっても意味があるに違いありません。

後に改めて述べますように、青木先生は中国の文学、さらにはその文化を深く愛した人でありました。むろん先生は研究者、学者ですから、対象を客観的に見る、分析することが求められるわけですが、先生の場合、その研究の前提に深い愛情があったことは確かでしょう。ならば知性の営みである研究において、先生が懐いていた対象への愛情はどういう意味をもっていたのか。青木正児という学者における知性と愛情の関係やいかん、といったことにつき、青木ファンであり、また中国の伝統文化について専門的関心をもつ私が、自分なりに了解したところ、中国語ではそういうのを「体会（ティーホイ）」というようですが、それをちょっとお話ししてみたいと思います。

なお演題の「好むことと知ること」というのは、「愛することと知ること」でもよかったのですが、それだと何だか女性週刊誌の恋愛コラムみたいだし、ここはいささか格好をつけて、『論語』の「これを知

る者はこれを好む者にしかず、これを好む者はこれを楽しむ者にしかず」ということばを下敷きにしてみました。実のところこのことばは、伝統中国における「知」のあり方につき、なかなか示唆に富むもののように思われます。

と言いますのは、孔子さまによれば、知るだけではまだまだ、それを好み、さらに楽しむところまで行かねばならぬ、というのですが、これは要するに学問の目的、その窮極が「道」との一体化だ、ということでしょう。ここでいう「知」とは、われわれがふつうに考える客観的な知性と同じではなく、すぐれて道徳的なもの、よって知を完成させるには、必ず好み、楽しむという境地に至らねばなりません。このことにつき朱子の注釈は、友人張栻（ちょうしょく）のことばを引用して、「知っていても好むことができないならば、それは知ることがまだ十分ではないのである。好んではいても楽しむところまで行かないのであれば、それは好むことがまだ十分ではないのである」と説明しています。

実のところ青木先生は、これとちょっと似通ったことを述べられたことがあります。「文学は須く味はふ可きである、陶酔す可きである」（『支那文学概説』序、一九三五）というのがこれで、こうした立場からすると、文学研究とは「知る」を通じ、すなわち読書による経験、熟慮による批判を通じて「観賞力」を高めるもの、そして究極では「陶酔」に至る、となりそうです。

しかしながら、近代的学問における「知」は目的であり、無批判状態そのものである「陶酔」に陥ったりすることはタブー、あくまで冷静な態度、客観性が要求される、常識的に言えばそうでしょう。こういう近代的な「知」は分析的な、対象をひとまず細かく分解し、それを詳しく吟味するもの、孟子のことばで言えば「鑿（うが）つ智」――『孟子』には「智に悪（にく）むところのものは、その鑿つがためなり」とありますし――、また『易』のことばで言えば「円にして神」ではなく「方もって智」、渾然たる全体性ではなく、はっきりものを区別しようとする尖った知性に相違ありません。

対象を区別し分析しようとする知が、伝統的学問においては二義的であり、さらには「道」との一体化を阻害しかねないという点で、警戒されたのは当然でしょう。「道の道とすべきは常の道に非ず、名の名づくべきは常の名に非ず」とは老子のことばなが

ら、「道」とは無限定な、定義することの不可能な全体性そのもの、それを敢えて分析しようとするのは、まったくこざかしい「小智」「私智」（『孟子』の「智に悪む…」句に対する朱子の注に見える）そのものだからです。

青木先生がおっしゃる「陶酔」すべしとの主張は、一見近代的学問研究と相容れない、むしろ中国における伝統的な知のあり方に近いもの、と思われなくもありません。しかし先生は、むろんのこと儒者や老荘の徒ではなく――強いて言うなら先生は、儒家が嫌いでむしろ道家を好まれたのですが――、わが国における近代的中国文学研究を代表する学者のひとりに他なりません。ならばこの事実と「陶酔」の主張は矛盾するのかしないのか。もし矛盾するとすれば、私の話はここでお仕舞になってしまうわけで、これはやはり矛盾しない、それも単に矛盾しないというだけでなく、より積極的な意味がある、と私は考えています。

それはなぜかと申しますと、「好きこそものの上手なれ」だからだ、ごく平たく言えばそうなります。自然科学の場合はまた少し話が異なるのでしょうが、いやしくも人類が生み出した文化遺産を研究するという場合、好きでないもの、何らの愛着や敬意も感じられないものと、ずっと付き合っていくことができるでしょうか。またそこから、何か言うに足る成果が生まれるでしょうか。もとより研究の対象が打ち倒すべき敵の所産であるなら、それは無価値ないし反価値と付き合うことになるわけですが、その場合には愛情のちょうど裏返し、憎悪の存在があるはずです。

結局、ある国の文化を、その国の哲学とか文学、あるいは歴史といったものを研究するには、そこに研究に値する積極的価値――ここでは反価値も価値に含めておきます――、がなければなりません。つまり知る以前に、知ろうという意欲を起こさせるものが必要なわけです。そしてこの知ろうという意欲は、平常の情況で言うなら、そこに魅力が感じられるから、好ましく、楽しめるものがあるからこそ生じてくるのに違いない。

青木先生の研究は、言うまでもなく中国の古典文学を中心とするものですが、先生が好み、敬意を払われたのは、決して古典文学に対してだけではなく、そうした文学を生みだした中国の文化、それを担う

中国人に、しかも過去の、理念的なそれのみではなく、現在の、現実の中国、中国人にまで及ぶものでした。過去の、理念的な、つまり現実のものではなく頭の中だけにある抽象的な中国、中国人に対する親近感とか敬意であれば、我々日本人の間では相当普遍的に見られる、少なくともつい最近まではそうでした。

これは歴史的経緯からして当然でして、なにせ日本の文化というのは二千年の昔から、中国の圧倒的な影響のもとに成立、成長してきたわけです。漢字、すなわちChinese characterを用いずして文をつづることは、今でも困難ではないでしょうか。またしかるべき地位の人が揮毫を頼まれたりすると、自分ではその意味がよく分かっていなくても、何か中国の古典にある文句を書いたりする、そうしたこともざらにあるでしょう。あるいはまた、「国破れて山河あり」といった詩句をいくつか諳んじられることは、今でもその人がまったくの無教養でないことを証するでしょうし、近代の日本画家にも、屈原とか寒山とか、そういった中国の伝説的人物を描いた人は珍しくありません。

しかしながら、そうした現象の背景にある中国イメージは、日本人が頭の中でこしらえた理念的なもの、あるいはその残像であって、現代の、現実の中国とははなはだしく食いちがっていたり、場合によってはまったく相反してさえいます。ですからこうした理念的中国像こそが中国だと考えると、「真」の、「本来」の中国はむしろ日本人が把握しているのであって、現実の、眼前にある中国は「誤った」存在であるという、どうにも倒錯した考えさえ生じてきます。

内藤湖南といえば、日本における近代的中国史研究のもといを定めた人で、私淑というとおこがましいけれど、私などもそれは尊敬しておりますし、後にまたちょっと触れるつもりですが、青木先生も大いに敬服した大学者です。その湖南が一九二六年に書いた文章に、「支那に還れ」(『東洋文化史研究』一九三六、に収む)というのがあります。この文章は当時の混乱を極めた中国が、将来どういう方向に進んでいくべきかを論じているのですが、湖南によれば、西洋式の改革をとなえている「現在の支那の青年は、多く自国の歴史に暗」く、自分のことをまるで分かっていない。中国は西洋式の近代化を図るべきではなく、そもそもそんなことは不可能である。

そうではなくて、中国は「本来の支那に還」るべきである。そしてその「本来の支那」というのは、「工業も持たず、富強でもない、そして政治としては殆どとりどころのない支那」であり、ただ「文化を以て国家第一の目的」とする、そういう国だと言うのです。

湖南は私にとっても尊敬措くあたわざる大学者ですが、この「支那に還れ」の議論が荒唐無稽であることは、事実が完全に証明しているでしょう。近代以来の中国は、ひたすらに富強を追求し、今も追求しつつあり、そのため懸命に工業化を図り、さらにその前提として、政治的な統一を実現、保持、強化しようとつとめてきました。ならば湖南ほどの学者が、なぜこんな主張をしたのでしょう。それは彼が中国の文化、といっても現在の、大きく変化しつつあるそれではなくて、過去の、理念的な伝統文化を偏愛する一方、それとはまったく矛盾することなく、近代日本の国家目標に都合のよい中国像をこしらえて、中国というのは「本来」こういうものである、それこそが真の中国だと信じたからです。

その国家目標というのは、これより五年前の一九二一年に書かれた文章、「支那人の観たる支那将来観と其の批評」（同上所収）の中に、すこぶる露骨に表現されています。「大体に於て支那人は、世界の大勢にも通ぜず、自分の歴史をも十分理解せずして、目前の問題に捉はれ、極めて浅薄なる議論を為す者が多い」が、「支那人に最も不適当なる政治経済上の仕事は他国民が代つて之を管理し、固有の支那国民は夫よりも高等なる文化即ち趣味性の産物たる芸術を完成」するのがよろしい。そして「他国民」が中国を「管理」するという場合、「日本が東亜に於て其の使命を有つ」、「日本は……東亜細亜全体を一つの世界とした圏内に於て、之が中心となるかも知れない」と湖南は言っています。

これからご紹介する青木先生の文章は一九二二年の作、つまり湖南の議論とほぼ同じ時期のものですが、ここには湖南とずいぶん異なった態度が看て取れます。この年、先生は中国に遊び、その紀行文を先生らが創刊された雑誌『支那学』に連載（一九四一年に至り、『江南春』に収む）されました。その最初の一篇、「杭州花信」にはこうあります。

西湖を見て帰つた人の口からその俗悪化されつつあることの歎声を数々吾々は聞き取つた。所で今来て見ると聞いた程でもない。私は楽観説

だ。……西湖を見るのにまず自分の頭に一つのカテゴリイを作つて置いて、それを尺度として論ずるからかやうな歎声が出るのである。勿論今西湖に建つてゐる西洋館は称賛出来ない。しかしそれが時代の要求であるからには、観者はむしろ一歩譲つて論ずべきである。……一度行き詰つた進路は必ず方向転換によつて新局面が開かれねばならぬ。清末における支那の文化が行き詰つてゐた事は云ふまでもない。今や吾が親愛なる支那青年諸君は方向転換を企てつゝある。……これがためには西湖の風致の少し位損ぜやうが損ずまいが問題でない。……なんの西湖の一つや二つ台無しにした所で構ふことはない。

内藤湖南は「現代の支那の青年」たちを「自国の歴史に暗」い、自らが何者であるかを分かっていないと切り捨てましたが、先生は「吾が親愛なる支那青年諸君」が「生々として活溌」であると見ました。この時先生は三十五歳、もはや青年とは言いにくい年齢ではあるでしょうが、彼らに共感、同情、期待しうるだけの、若々しい感覚をまだまだ保持しておられたわけです。そういう先生は、西湖についてもそれが「生きてゐる、動いてゐる」ことを断然承認します。「単に西湖を古典的な名勝としてのみ見」たい人は、現在の、現実の西湖には来ない方がよく、「目を瞑して幻影でも画いてお置きなさる」がよかろう、そう先生は突き放しました。

なお誤解はないと思いますが、念のため附け加えておけば、中国という「この尊重すべき大国」が「方向転換」をはたすためなら、「なんの西湖の一つや二つ台無しにした所で構ふことはない」と先生がおっしゃられたのは、むろんわざと極論をなしたものです。しかしこの極論は、今の中国にとって何が一義であるのか、その窮極を措定するためのものであって、いたずらな奇論などでは決してありません。窮極をもたない生ぬるい「良識」論は、いつの時代でも人に受け入れられやすく、一時の主流ともなるでしょうが、要は俗論そのもの、時間の批判にはとても耐えられません。

さて先生のこの文を読むと、想い起されるのは芥川龍之介です。彼が大阪毎日新聞の依頼で中国を旅行したのは一九二一年、そして同年のうちに「上海游記」が、翌年には「江南游記」が大毎紙上に連載

されました。この「游記」は一九二五年になって、「長江游記」などともに『支那游記』の一書となったのですが、その自序にこれは自分の「Journalist的才能の産物である」と言い、また「江南游記」のうちには、「我我は車掌の風采にさへ、我我の定木を振り廻しやすい。……我我は如何なる場合でも、かう云ふ僻見に捉はれてはならん」と述べられてもいます。されば定めし異色の文字も多かるべし、という期待が高まってきます。

かくしてこの「游記」を読んでいきますと、なるほど例によって才気は横溢し、文章もうまい。じっさい才気にせよ筆力にせよ、芥川なんてただただ羨むしかない私などから見ますと、彼は自らの才能を十分に、率直に言えば十分以上に意識し、ことさら顕示しているように感じられるのですが、とにかく並の文章ではありません。ですがその内容に感心するかというと、それはそうでもない。青木先生の「杭州花信」と同じ年に発表された「江南游記」で、彼はこう言っています。

西湖は思つた程美しくはない。少くとも現在の西湖なるものは、去るに忍びざる底のものぢやない。……西湖は……湖岸至る所に建てられた、赤と鼠二色の、俗悪恐るべき煉瓦建の為に、垂死の病根を与へられた。……しかもかう云ふ西湖の俗化は、益盛になる傾向もないではない。……私は……こんな泥池を見てゐるよりは、日本の東京に住んでゐたい。

つまりこれは、あまたある西湖俗悪化を嘆く声の一で、それ以上のものではない。西湖に限らず中国の各地で芥川が見た「現代の支那なるものは、詩文にあるやうな支那ぢやない。猥褻な、残酷な、食意地の張つた、小説にあるやうな支那」（「上海游記」）でしかありませんでした。彼は「詩文にあるやうな支那」、現実には存在しない「幻影」を愛好し賞讃することには吝かでなかったものの、「現代の支那」には不潔で俗悪で、騒々しく気味の悪いものしか感じられなかったのです。彼は自らの文中に「下等な言葉を使」っていることを説明し、「支那の紀行となると、場所そのものが下等なのだから」、それは仕方のないこと、そうしなければ「溌溂たる描写は不可能である」（同上）と言っています。中国とは端的に「下等な」場所、すでにそうであれば、どこに行き何を見ようと、すべてはロクでもないものに決まっています。

断っておきますと、当時の中国が不潔でみじめなものに満ち満ちていたことは、紛れもない事実だったでしょう。芥川は決してことさらウソをついているのではない。当時とは比較にならぬほど発達した現在の中国、それも北京とか上海といった、よほど特殊な大都市に行っても、ぞっとしないものを見つけたい、どうしてもそうしたいというのであれば、さしたる苦労はいらんと思います。近代以来の長く苦しい歴史が与えた傷は、なまなかのことでは癒えないし、また近年来の爆発的な発展に伴う、新しい矛盾も顕著だからです。

ですから「自分の頭の中に」、中国は「下等な」場所であるという「一つのカテゴリイを作って置い」た場合、はっきりと口に出しては言わなくても、腹の中では中国なんてどうせロクなことがない国だ、と思っているならば、見るもの聞くもの、中国のすべては「下等」である、という結論を導き出すことも難しくはないでしょう。だがそれは掛け値なしの判断停止、「知る」とはおよそ無縁の態度です。このことにつき、魯迅は次のように述べています。

日本の学者や文学者は大抵固定した考(かんがえ)をもって支那に来る。支那に来るとその固定した考と衝突する処の事実と遇う事を恐れます。そーして廻避します。だから来ても来なかったと同じ事です。ここに於いて一生出鱈目で終わります。（増田渉宛書簡、一九三二）

或る旅行者が退隠した金持の大官の書斎に這入つて、とても価値の高い硯を沢山持つておつた所を見てから支那は文雅な国だと云ひ、又或る観察者はちよつと上海まで出掛けて猥褻本や絵を二三種買込み変な見世物を探し出して支那はエロチツクな国だと云ふ。江蘇や浙江あたりの人々が竹の子を盛んに食つて居る事までもエロチツクな心理の表現の一証拠として数へ上げられる。ところが……そんな事を見ると今迄の結論は通じなくなるから……今度はどうも支那は中々わかりにくい。支那は謎の国だと云ふ。

（内山完造著『生ける支那の姿』序、一九三五）

ここで「文雅な国」と「エロチツクな国」という、二つの中国イメージが例示されているのは、なかなか意味があると思います。というのも「文雅な国」の方は、過去の日本人が中国にあこがれる中で作り上げた、理想的イメージの残像でしょうし、「エロチツクな国」の方は、近代の日本人が作り出した、ひ

とつの典型的中国イメージだと考えられるからです。中国を性的イメージでとらえるというのは、芥川龍之介の「猥褻」もそれですし、現代でもたとえば三島由紀夫は、武田泰淳の小説『風媒花』を「解説」（一九五四）してこう言っています。

その（中国の）国土は綾織の色あせた海のかなたに、……その蠱惑的な寝姿を示している。『風媒花』の女主人公は中国なのであり、この女主人公だけが憧憬と渇望と怨嗟と征服とあらゆる夢想の対象であり、つまり恋愛の対象なのである。皆がこの女の噂をする。女たちでさえも。——しかも各人の恋は片恋を以て終……る。

中国は「蠱惑的な寝姿」で「征服」者の欲望を掻き立ててやまない存在なのですが、実のところそこから生ずる「恋愛」感情——三島は日中戦争も「民族的恋愛の一形式」だったと言っています——は、あくまで「片恋」であって、中国側の意志や感情とはまったく関係ない、というか、中国はただ端的に「蠱惑的」なのであって、意志とか感情なんてない、たとえあったとしても、何ら考慮するに値しないのでしょう。

実のところ性的イメージで「あらゆる夢想」の対象をとらえるというのは、何も日本人だけの専売特許ではありません。そのことは「オリエント」、とりあえずはアラブ・イスラム世界を中心とする「東方」に対する近代西欧の「知」のあり方を問うた、エドワード・サイード著『オリエンタリズム』（一九七八、ここでは八六年の今沢紀子訳による）が教えてくれます。

このサイードの本は、かつて日本でもずいぶん評判になったものなのですが、少し時がたって「最新」でなくなると、いわば去年、おととしの流行色のごとくになり、今では言及されることもあまりないようです。思想やら学説をも流行として消費する、消費してしまえば何ものこらず、次の、新しく輸入された流行を追う、そしてその最新ファッションをうまく着こなした人が一番かっこいい。おそらくわが国では、そうしたことが二千年前からずっと繰り返されてきたのでしょう。

ともあれこの『オリエンタリズム』の中に、フローベールの『エジプト紀行』を論じたところがあり、そこでサイードはフローベールの叙述が常に性的連想をまじえていることを例示した上で、こう指摘し

ます。実のところ、この

モティーフそのものは奇妙なくらい旧来のものと変わりばえのしないものだったのである。いったいどうしてオリエントが、今日なお、豊饒さのみならず、性的な期待（と威嚇）、倦むことなき官能性、あくことなき欲望、底知れぬ生殖のエネルギーを示唆しつづけているように見えるのか。これは、あれこれ思いめぐらすことができそうな問題である。

ここに述べられているオリエント像は、おそらく三島の中国像と深く共通しているでしょう。

さて「下等」とか「エロチツク」とか、あるいは逆に「文雅」でもよいのですが、そうした「固定した考」、あるいは青木先生のいう「カテゴリイ」は、日本人が自分で勝手に作り上げたものであるにもかかわらず、ほとんどの日本人はそれを拠りどころとして中国を判断し、かつその判断の正しさを微塵も疑いませんでした。つまり色眼鏡で中国を見ることの妥当性が疑われたことはなかった、というより、そもそも自分が色眼鏡をかけているとは、まったく自覚されなかったのです。中国が何であるかはすでに決定されていて、それこそが現実であり真実である、となっているのですから、いくら取材旅行やら現地調査、あるいは文献による研究をやろうと、新しい中国像は何も生まれてきません。それらは単に、あらかじめ用意されている結論の正しさを証明するだけのことです。

さきほど引用したサイードは、このことを一般化、つまり抽象化して、――その分だけ難しい言い方になっていますが、――こう述べています。

知識をもつということは、それを支配すること、つまり、それに対して権威を及ぼすということにほかならない。……我々はそれを知っているとともに、またそれがある意味で、われわれが知っているがごとくに、存在しているからである。……（専門的著作と呼ばれるテキストは）たんに知識だけではなく、そのテキストが叙述しているかに見える当の現実をさえ創造することができる。

こうした知る側と知られる側の「両者の関係は根本的に力の関係」だとサイードは言っていますが、そのような関係が厳然と存在する、それも当時であれば、絶望的な大きさをもって存在する中で、青木先生が「方向転換を企てつゝある」「支那青年諸君」

に共感、同情、期待しえたことは、いかにも稀有の見識だったでしょう。先生はむろん「古典的な名勝」としての西湖、その「若やいだ和らかさを持った景物」を深く愛し称賛されましたが、同時に「西湖は小数の物好きな日本遊覧客のために保存されてゐる骨董品でない。西湖は生きてゐる、動いてゐる。そして天が支那国民に恵賜した一つの娯楽場である」と断言されました。つまり古典的世界は決してそれだけで、抽象的に存在しているのではないし、日本人のためにあるのでもない。それは何よりもまず中国人のものであるし、かつ現代の現実とも連続しているのだ、と考えられたわけです。

青木先生の有名な学問的主張のひとつに、漢文を読むには訓読を棄て、「直下（ひっくりかえらないで上から下にそのまま）音読」すべし、それも理想的には「全然支那音読に依」るべし、というのがあります。これは『支那学』誌上に発表された「本邦支那学革新の第一歩」（一九二〇、後「漢文直読論」として『支那文芸論叢』一九二七、に収む）で述べられたもので、言われてみれば当然ですし、またそれは江戸時代の荻生徂徠などの説を承けたものでもあるのですが、しかもたしかに「革新の第一歩」たるを失わない、画期的な主張だったと言えるでしょう。

もっとも「全然支那音読」で中国の典籍を読むというのは、現実には相当に大きな困難があり、また翻訳スタイルとして言うなら、訓読にもなかなかに意味があるとは思います。じっさい先生の著書論文の中でも、訓読は往々にして用いられているのです。それで先生の主張は、今日でも十分に実現されているとは言いがたいのですが、翻訳ではなくまずどう読むのかということで言うなら、その本質的な正しさは疑えません。

ならば先生の説がもつ「本質的な正しさ」は、いったいどこから来るのでしょう。先生は「根本に於て漢文が外国文」であること、よってその学習には「吾人が欧文講習の法」を用いるのが当然だと考えました。先生のこうした見方は、「支那文学の理解と観賞、それは彼等（中国人）に比して我等は話にならぬ」という発言（「支那文学研究における邦人の立場」一九三七、『江南春』所収）ともなるのですが、とにかく漢文は中国語であり外国文であるとは、あまりにも当然、改めてそう言うのもおかしいほどでありながら、余人は敢えて言いえなかった、一針血

を見るの説でありました。中国の典籍をいきなり訓読することは、いつの間にか、それがあたかも日本語の作品であるかのような錯覚を与えるでしょう。つまり「クニヤブレテサンガアリ」という日本語が、やがて「原文」だと思われてきて、ついには本物の原文、中国語のそれはどこかに行ってしまう。そしてそうなれば、原文の構造とか語法、またなによりリズムや韻律を親切に把握することは、到底かなわなくなります。

漢文は訓読すれば十分である、それで完全に理解できるという考えは、「詩文にあるやうな支那」、日本人の頭の中だけにある理念的な中国こそが中国というのに値するのであって、現在の現実にある中国は「誤った」中国だ、という考えに通ずるものと思います。自分で勝手に作り上げた中国像を基準として現実の中国をはかり、失望し、軽蔑し、すべて「下等」であると決めつける、そういう態度を排された先生は、まったく正当にも中国文化を中国人のもの、ヨーロッパ諸国のそれと同じような意味で外国文化であると考え、そして「この尊重すべき大国」のうちに、「生々として活溌」なものが胎動しているのを見逃しませんでした。

こうした先生の見識が、中国文学研究の上で遺憾なく発揮された論文、それが「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」（一九二〇、『支那文芸論叢』所収）です。この論文の価値や意味については、私のような門外漢があれこれ言わずとも、れっきとした専門家が断案を下しています。まずは増田渉先生で、

青木さんのこの論文は、中国の「文学革命」の運動を、わが国に紹介した最初期の、殆ど唯一のものではないかと思う。……少なくともこの論文の中には青木さんの「若さ」があった。（「青木さんと魯迅」、『全集』第一巻月報、一九六九）

と述べられ、また小川環樹先生も、この論文は

一九一八年の「文学革命」の運動に対する日本で恐らく最も早い反響であろう。……「小説に於ける魯迅は未来のある作家だ。……」の数語は予言的な響きをもつ。（「自由不羈の精神」、『青木正児全集』第二巻解説、一九七〇）

と評されています。

民国初年に起きた「文学革命」運動は、単に中国文学史上の一大事件であるのみならず、現在用いられている高校の世界史教科書などにも必ず登場するほどの、彼の国近代史上の重大事件でした。しかし

当時に在って、この運動に何か特別の、注目に値する意味を見出していたのは、少なくともわが国では、ひとり青木先生あるのみだった、と言ってよいでしょう。

事柄の認識というのは、ちょっとペダンティックに言えば「ミネルヴァのふくろう」（ヘーゲル）、平たく言えば「下司の知恵は後から」であって、まだ完全には収束していない、眼前でなお展開されつつある事件のもつ意味、その本質を正しくとらえるというのは、本当に難しいことです。ことが終わり、結果が出た後になって、そんなことは最初から分かっていた、私ははじめからそう思っていた、などと言いだす下司は、それこそ掃いて棄てるほどいて、新聞やテレビでも常にお目にかかりますが、先生のごとき真に「予言的な」評価をなしえた人は、当時に在ってまさに「伴侶なく、孤影子然（げっぜん）として曠（こう）野を行くものであった」（「支那かぶれ」一九三六、『江南春』所収）に相違ありません。

さて、先生の批評がよく本質を衝くものでありえたのは、「何れも溌剌たる元気と希望とに輝いた、一寸触れば撥ね返へるやうな弾力性に富んだ人々」と先生が評した、文学革命をとなえる諸氏の「若さ」と、自らの「若さ」が同調し、共鳴したからでしょう。先生の一文を読んだ魯迅は、「同情と希望を以って然も公平な評論を衷心より感謝します」と言っています（青木宛書簡、一九二〇）が、実のところ文学革命という生まれつつあるもの、可能性から現実への過渡期に在るものに対する「公平」が実現したのは、そもそも「同情と希望を以って」それを観察していたからに違いない。

ですからここでの「公平」とは、愛情があればこその客観性であり、同時のその「同情と希望」とは、決してあばたもえくぼ式の、ひいきの引き倒しではありません。そんなものは、少なくとも学問研究上の愛情というには値しません。「同情と希望」を懐いていたがゆえに「公平」でありえた先生は、彼らの文学的実践がなお幼稚であり、「創作的方面は新詩を除いては今の所語る程の作物がまだ出てゐない」と指摘する一方、その幼稚な、生まれ出でつつあるもののうちに、「未来」を看て取ったのです。これがいかに正しかったかは、先生の「予言」がピタリと的中したことで、遺憾なく証明されているでしょう。

以上はほぼ三十代半ばまでの、ということは同志

社大教授だった時代の先生が書かれたものについての話をしたわけですが、ならばそれ以後の、東北帝大助教授、教授、転じて京都帝大教授をつとめられた時期はどうだったのでしょう。この後半生期、先生は次々と重厚な学問的著作を世に問い、学者としての業績を積み重ねられ、その意味でははなはだ充実した時を過ごされました。ですが「支那青年諸君」に「同情と希望」を寄せる「若さ」の方は、しだいに薄らいでいったのです。先生が愛する中国は、ようやく古典的世界のうちに限定されていき、現実の、ナマの中国との距離は、それに反比例して広がっていきました。先生晩年の作である「支那と云ふ名称について」(一九五二、『中華名物考』所収)は、そうした距離の大きさをよく物語っていると思います。

この一文で先生は、近年では支那という呼称を用いるのがあたかも怪しからんことのように言われるが、そんな馬鹿なことはない。支那というのはもともと美称であったし、わが国でそれを用いたのにも何らの悪意はない。だからそんなことを問題にするのはまったくのナンセンスだ、と主張されました。

たしかに、支那ということばの歴史的由来を尋ねるならば、先生のおっしゃることは正しいでしょう。また日本人ならぬ中国人、それももっとも誇り高い中国人であった魯迅も、さきにちょっとばかり見たごとく、日本語で書いた文章では支那、支那人ということばを用いています。魯迅は愛憎のはっきりした厳しい人であると同時に、腹のすわった大度の人でもありましたから、当時の日本では中国のことを支那としか言わない以上、日本人に向けて日本語を用いる時には、自らが語りかける対象に合わせた言葉づかいをしたわけです。

しかし先生も認めておられるように、支那ということばが「一朝にして彼国の人に侮辱の語と受取られるに至った」ことは、争えない事実です。ならば相手が嫌う呼称を、敢えて用いつづける必要がどこにあるでしょう。また先生によれば、侮辱と受け取られるようになったのは「之を言ふ者の心と之を聞く者の心とが相反撥した為である。お互ひに虚心平気なれば何でもないことである」というのですが、ではなぜ両者の心は「相反撥した」のでしょう。それはけんか両成敗みたいな、双方の責任だというのでしょうか。

かつての先生に見られた「若さ」は、やがてその輝きを失っていきました。それは生理的な老化の心

理的反映でもあるでしょうが、根底的には、時代がそうした「若さ」の保持を許さなくなった、ということだと思います。またしても魯迅に登場してもらえば、その最晩年である一九三六年、すなわち日中戦争が公式に、全面的に始まる前年、彼は「日本の作者と支那の作者との意思は当分の内通ずる事は難しいだろうと思ふ。先づ境遇と生活とは皆な違ひます」（増田渉宛書簡）と言いました。魯迅のいう「当分の内」がいつまでのことなのか、一九四九年までは むろんのこと、一九四九年になっても、更にはずっと降って今日になっても、それはなお続いているように私には思えるのですが、とにかく両国の人間が「お互ひに虚心平気」になるのは、もはや不可能でした。

日中両国間の阻隔は、個人の善意ではどうにもならぬ深刻なものとなり、先生もようやく老いてゆかれました。しかし先生の研究のその出発点に、これまで述べてきたような共感や期待があったことは、後年になってもやはり大きな意味をもっていたでしょう。現実の、ナマの中国とのつながりは失われていったにせよ、先生の主観からすれば、その中国、中国人、中国文化に対する愛情には、何らの変化もなかったに違いありません。また先生のそうした愛情が、打算とか流行などとは完全に無縁であって、ただひたすら自らの感覚と見識のみを信じた、真に内発的なものであったことも確かです。そうした内発性にもとづく研究は、後半生においても「自由不羈」で、いかにも「これを楽し」んだ、独創的成果を生むことになります。

この話を始めるに当って私は、「これを知る者はこれを好む者にしかず、これを好む者はこれを楽しむ者にしかず」という『論語』のことばを引用しましたが、話をそろそろ収束に向かわせたい今、改めて『論語』に見える別のことば、「古えの学者は己れのためにし、今の学者は人のためにす」というのを引っぱってきて、それを枕にしたいと思います。このことばは学問が純粋に自得のため、自らの内的（道徳的）要請のみにもとづいて行なわれるべきであって、人に知られたいとか何かの役に立てるといった、そういう外を意識した、功利主義的なものであってはならんということ、孔子の時代ではそこまで厳格に考えられていなかったかもしれませんが、近千年ではそういう意味だとされてきました。

むろん今日の学問は、もはや道徳を本質とするものではなく、むしろ直接、間接に何らかの有用性とつらなるべきもの、その意味では功利主義的なものとなっているでしょう。ですから私が今このことばを持ち出してきたのは、別に反功利主義をとなえようというわけじゃなく、いわば断章取義的に、自発性、内発性の主張としてこれを使おうと考えたわけです。さきほどちょっと述べましたように、青木先生の研究は、流行に乗ずるとか世間のウケをねらうとか、そうした「人のためにす」るものとは本質的に異なり、まったく「己れのためにす」るものでした。

このことは、いわゆるアカデミックな研究書、――実のところ私は、この研究書とか一般書といった言い方がきらいで、ほとんど意味のない区分じゃないかと思っているんですが、まあふつうには専門的な研究書と目されるであろうもの――『支那近世戯曲史』（一九三〇）とか『支那文学思想史』（一九四三）、『清代文学評論史』（一九五〇）などについても言えるでしょう。『戯曲史』は明清期の戯曲史という、これまで誰も手を着けたことがない分野を開拓したもので、一九三六年には早速に中国語訳が出て、中国においてもこの方面の研究における必読の基礎文献となりました。ただしこの『戯曲史』を書くについては、いささかの屈折というか、波瀾がなくもなかった。

と言いますのは一九二五年、近代中国が生んだ大学者であり、戯曲研究の大先輩でもあった王国維を先生が訪ねられた際、王氏は「元曲は生きて居る、明以後の曲は死んで居る」と言い放ったのです。これは先生にとってずいぶんとショックだったに相違なく、二年ほどもたってからこの時を追憶した文章（「王静庵先生の追憶（二）」一九二七、『江南春』所収）には、「わたしはその（王氏『宋元戯曲史』の）余瀝（のこりのしずく）を嘗めて甘んぜんとするさもしい心の持主である」なることさらなことばさえ記されていますし、『戯曲史』自序にも「余黙然として以て答ふるなし」だったとあります。

しかしながら先生は、王氏のことばに打ちのめされてしまったわけではありません。「明清の曲と雖も悉く死文学ではない」、先生はそういう自らの判断を信じておられました。そしてその自信のゆえに、「この時私は心に少しく反抗を感じ」て、そのまま研究を継続されましたし、また『戯曲史』を完成した際

には、「先生を九源より起たしめて（生き返らせて）鄙著一本を呈せば、未だ必ずしも破顔一笑せずんばあらざるべし」と言う（自序）こともできたのです。「仁に当りては師に譲らず」（『論語』）、とはちょっと大仰にすぎるかもしれませんが、とにかく先生のこの『戯曲史』は、その自信、自得の産物でした。この点はむろん『文学思想史』や『評論史』でも同じことです。これらにつき橋本循先生が、「創意に満ちた文学史」と評された（『全集』第二巻跋）その「創意」とは、揺るぎない自信に裏づけられた自得の発露だと言ってよいでしょう。

ただし青木先生は近代的中国文学研究を開拓した第一世代ではありませんでしたから、これらの著作にも当然ながら前提となる研究が存在しています。『戯曲史』について言えば、すでに言及した王国維の『宋元戯曲史』、『文学思想史』『評論史』について言えば、先生の師たる鈴木豹軒（虎雄）の『支那詩論史』がそれです。したがって先生のおっしゃる「新しき体系による方法と未開の分野を拓くこと」（「支那文学研究における邦人の立場」）という点から言えば、これらの著作における先生は、やはり開拓者であるよりは後継者であるでしょう。断っておけば、これは歴史的条件から決定されたことで、後継者であるがゆえに開拓者ほど偉くない、というのではありません。昔から草創と守成はどちらが難しいか、などということが言われますが、よき後継者として先人の業績を発展させることには、開拓者となるに劣らぬ困難があると思います。

ですがそこに青木中国学の真骨頂があるか、あるいは真骨頂が典型的にあるかと言えば、それはむしろ他の著作に求めた方がよいのではないか、と私には感じられます。そのように感じられるのは、私が中国文学の素人であるため、専門的議論には付いて行けないからでもありましょう。だがそれだけではない、という気がするのも事実です。と言いますのは、これらの著作には楽しさがあまり感じられない、あるいはより少なくしか感じられないからです。

もうずいぶん前、先生の受業生である入矢義高先生のお話しを聞く機会があったのですが、その時入矢先生が語られたあれこれの中に、こういうのがありました。かつて青木先生に対し、『清代文学評論史』ははなはだ苦しんで書かれたのではないかと尋ねたのだが、先生は特に何ともおっしゃられなかった。しかし自分にはどうしてもそうとしか思えない、

と。この話を聞いた時、私はわが意を得たりというか、やっぱりそうかと思ったのです。これらの重厚な学術著作における先生は、つとめて禁欲的な態度を取り、自らの思いや感情を「自由不羈」に表現しようとはされませんでした。それは書こうとするものの性格からして当然と言えば当然なのですが、素人読者からすると、今ひとつ痛快さに欠けるように感じられるわけです。

ならば青木中国学の真骨頂が典型的に、痛快に表現されている著作は何かと言えば、それはすでに紹介した若き日の論文、そして『江南春』（一九四一）や『華国風味』（一九四九）、『琴棋書画』（一九五八）、『酒中趣』（一九六二）など、いわゆる研究書とは見なされていないであろう作品群だと思います。これらの著作における先生は、いかにもくつろいで、時にはちょっと冗談も言い、ただひたすら己れが興味をいだくもの、価値ありと認めるものだけに没頭しておられます。ですから先生は十分に楽しんでおられ、その楽しさがこちらにも伝染してくるのです。

しかもそれら「これを楽し」んだ作品は、決してただの「戯れ草」（『江南春』自序）ではありません。それは肩肘はらぬスタイルで書かれてはいても、やはりプロの中国学者が、あくまで真剣な態度でものした学術エッセーなのであって、自由に書かれている分だけその独創性がのびのびと、際立って現れていさえします。たとえば「支那の絵本」の一篇（一九二九、『江南春』所収）は、わが国における中国版画史研究の濫觴と言ってよく、そこに附された図版も、さすが格別の審美眼をそなえた先生だけあって、実によく選んであります。当時の日本で中国の版画に注目していた人には、なお大村西崖があって、『図本叢刊』という覆刻本シリーズ（一九二七～三〇）を刊行していますが、中国における版画発展の跡をたどり、系統だてて叙述する、つまり愛好、鑑賞の域を越えて、研究と言うに足る仕事をなしとげたのは、おそらく先生がはじめてでしょう。

またたとえば「饂飩（うどん）の歴史」（一九四五、『華国風味』所収）は、「近年食生活の窮屈なところから、この方面の神経がただ尖りに尖つて、……文学も糸瓜（へちま）もあつたものではない」（『華国風味』自序）という情況の中で著されたものですが、これは食物史、飲食文化史という研究分野を開拓した一篇、やはり好事家の道楽仕事などとは断然撰を異にする、堂々たる学者の仕事です。

このほか、中国における「文人」なるもの――中国の「文人」は日本でいう文人とは全然異なるもので、政治とは無縁の風流人などと考えるならば、それははなはだしい誤解です、――を研究し、その根底を定めた「中華文人の生活」（一九四七、『琴棋書画』所収）とか、取り上げるべき文章はまだまだいくらもあるでしょうが、今はこれくらいにしておきましょう。

「これを楽し」み、「己れのために」した、そういう特徴が端的に現れた著作の数々は、今も文庫本になったりして、ひろく一般に読みつがれています。これはそうした著作が比較的読みやすく、また面白いからには違いありません。じっさい『支那近世戯曲史』などになりますと、専門家、ないし専門的関心をもつ人を主たる対象として書かれているだけに、曲高くして和するもの寡なしとでも言いますか、一般にはやはり取っつきにくいと感じられるでしょう。

ですが取っつきやすく面白いというだけなら、そんなものはいくらもあるでしょうから、先生の著作がなぜ長く読みつがれているのか、その理由を十分には説明できません。ならば他にどういう理由が考えられるかというと、まずはその文章が先生の個性を十分に表現していて、「性情」の文としての魅力を備えているということ、しかも往々にして、それらは学者の仕事としても一級の、創見に満ちた作品となっている、ということが挙げられるでしょう。つまりそれらは、形式と内容の双方において、単に取っつきやすいとか面白いという以上の、より深い価値を有しているわけです。

さて今も読みつがれるこれらの著作は、それが世に問われた当初から高く評価され、評判になっていたのかと言えば、どうもそうではない、特に学界においては単なる筆のすさびとして、ほとんど問題にされなかったようです。学問というのはいかめしくて難しげなもの、分かりにくければ分かりにくいほど高級であるという感覚は、今でもなかなかしぶとく生きつづけています。ですから今日でも、いわゆる研究書とか学術論文には、まるで蝋を嚙むような、味もそっけもない文章で、しかも日本語としてまったく普通でない、何とも理解しがたい表現を用いたものがたくさんあります。またそこで扱われる問題にしても、雅俗の分というか、アカデミックなもの

とそうでないものとがあって、先生の当時であれば、絵本だの食いものだのを扱った論文など、非主流なのはむろんのこと、異端的でありさえしたでしょう。

そもそも先生は、その経歴からしてすこぶる屈折あって、最初からオーソドックスな道を歩まれた方ではありません。先生は京都帝大を卒業された後、十年以上官学とは無縁のまま、「在洛浪人連中」（「湖南先生逸事」一九三四、『江南春』所収）の一人としてすごされました。また師承にしても、筋から言えばやはり狩野君山（直喜）の弟子ということになりましょうが、実のところ両者の関係は、いささか微妙だったようです。

帝大に入って最初に講義を受けようとする際、「風采の揚らぬ矮躯（わいく）古洋服の事務員らしい人が一緒に入り来たり」、あれこれ「注意を附加へて退去した。あの事務員は生意気なことを云ふな、と私はいぶかりの眼を以て其れを見送った」ところ、次の時間になって、何とそれこそが「吾師君山先生」だと分かった、とは君山を追悼した際の思い出話（「狩野君山先生と元曲と私」一九四八、『琴棋書画』所収）ですが、ここの描写には単純な敬慕の念だけですまないものがあるように思われます。

これと相似た叙述は、帝大を卒業する時の話にもあって、元曲に関する卒論を提出された先生は、「これに序するに一篇の戯文をもつてした」のですが、「忽（たちま）ち吾が師の温情によつて改作せよと命ぜられ、私はそれを引きちぎつて師の前を引き退つた」と述べて（「支那かぶれ」）おられます。こういうものは卒論にふさわしくないから書き直せと命じたら、眼の前でそれを引きちぎって出て行ったとなれば、命じた方は面白くないでしょうし、そういう事件を後になって、しかも当の相手の在世中に、改めて筆にしている先生の感情というのも、ある程度推測できるのではないでしょうか。

また内藤湖南の追悼文である「湖南先生逸事」には、かつて青木先生ら「在洛浪人連中匿名の暴れ書き」中に、東京方面の悪口などがあって、それを自分たちが関係しているように思われるのを気にした君山が、「序（つい）でに弁明して置いてくれ玉へ」と命じたが、「湖南先生は「ナニかまうものか」と笑ひ居られたり。余は先生の命なれどそのまゝに捨て置きたり」とあります。この場合、君山湖南両師に対して先生がどう思われたか、それは想像に難くありません。

ちなみにこの「逸事」、もともとは『支那学』七巻三号に附録の「内藤湖南先生追悼録」に収められたものなのですが、他の諸篇がみなごく普通の、湖南をたたえしのんだ文章なのに対し、先生のは「逸事」というとおりのエピソード集ですし、その文章がまた軽妙で時に諧謔をまじえ、断然異彩を放っています。これはもとより湖南を軽んじたからではなくその正反対、「放胆で、そして見識が高くあらせられ」た湖南（「飲酒詩雑感」一九六一、『酒中趣』所収）に深く傾倒し、親しみを感じていたからこそ、敢えて月並みな追悼文を避けられたのだと思います。

さらに専門の中国文学研究について言うと、その『支那文学思想史』が「吾師鈴木豹軒（虎雄）先生の『支那詩論史』を承けていることは、自序にも明らかに述べられていますし、そこには「本書の題簽は恩師鈴木先生に懇願して御染筆を賜はつた」のだが、これは「光栄の至である」と記されてもいます。また『支那近世戯曲史』によって学位を得た時、豹軒から「見事な賀詩の揮毫を賜わつた」が、その結句に「功名ヲ求メズシテ功名ヲ得タリ」とあったのは、「学位を授与されたよりも有難く、終生忘れることのできない知己の言である」（「師を語る」一九五五、『琴棋書画』所収）と述懐されました。こうして見て来ると、先生は湖南と豹軒、すなわち一は文学ならぬ史学の専家、一は文学の専家ながら、必ずしも学界の中心に居られたわけではないだろう人、この二人にもっとも敬愛の念を感じておられたようです。

さてずいぶんと長広舌を弄して私の「体会」を語ってまいりましたが、結局のところ先生の著作が私を引きつけてやまないのは、それが愛情を根底とした高い見識と深い学識の産物であり、ただひたすら「己れのために」した自得の学を、個性豊かに伝えるものであるからだ、ということになりましょう。時流におもねるとか損得勘定をするとか、そういう「人のためにす」るところは微塵もなく、自らが好み楽しむものだけに没頭し、「孤影孑然として曠野を行」かれた先生の姿は、またしても『論語』のことばを用いるならば、――先生はそういう儒者風のしわざをひどく嫌われるでしょうが、――「これを仰げばいよいよ高く」、「これに従わんと欲すといえども、由るなきのみ」、どうにも追随しようがない、とはいえ「これを能くすと曰うには非ず、願

わくは学ばん」、及ばずながら、あたう限りは努めたい、とそう思うのではあります。これをもって私の拙い話を終わります。

（この小文は名古屋大学附属図書館二〇〇七年秋季特別展における講演にもとづくものである）